

## 学者と講釈師のあいだ

——平田篤胤『靈能真柱』における安心論の射程

みつまつまこと

一 はじめに——『靈能真柱』と「大意もの」

思想家平田篤胤の独自性を説く際にまず挙げられるのは、『たまのみはしら靈能真柱』だと言つてよいだろう。本居宣長が『古事記伝』の附録とした服部中庸の「三大考」を援用しながら、世界の成り立ちを説明するとともに靈魂の行方を明らかにしたこの著作は、篤胤がはじめて刊行して世に問うた作品であり、日本思想史学の創始者とも呼ぶべき村岡典嗣以来<sup>1</sup>、この書に表現された幽冥観に着目するのが篤胤研究の主流であったと見て、そう間違いではあるまい。最近の研究も、本書は篤胤の主著であると主張する<sup>2</sup>。死生学研究の流れの中でも、日本の近世以後の死生観を論じるにあたつては、『靈能真柱』に示された篤胤の顕幽論を参照するのが一つの常道ともなつて<sup>3</sup>いる。死生学にとつて、日本における生と死をめぐる問いの蓄積から学ぶものがあるとするならば、この書の位置付けの如何は、問われて然るべき論点である。

ところで、平田篤胤の特質をその講釈師的性格に見る研究も少なくない。次に掲げるのは、彼の講談の宣伝文である。

【史料一】<sup>4</sup>

菅能屋先生門人

御国学講談  
おんこくがく  
みくにまなび

菅能屋先生毎夜

出席いたされ候

藤原元良  
藤原国守  
ふじはらのもとよし  
ふじはらのくにもり

一 古道の大意

- 一 神代のあらし又御国は神国にして万ノ物  
万ノ事の万国にすぐれたること惣じてこの  
御国のありがたき所以を演説す

一 仏道の大意

- 一 天竺の国風釈迦一代のあらし仏法の唐土  
に伝はり夫より御国へわたり十宗と分りたる  
宗旨の立かた仏道の心得大かたを説く

一 俗神道の大意

- 一 世にいはゆる両部神道唯一神道ともに  
外国の道々の意をまじへ説たるものにて  
真の神道とハ異なる誤りを悉く演説す

## 一 儒道の大意

一 唐土の開闢より歴代のことすべて漢籍どもの弁また俗の腐儒者どもの非説を弁じ惣じて漢土の学問の大略を演説す

## 一 歌道の大意

一 歌のはじまり及び哥を詠む心ばへまた万葉家近体家といふ所以また哥書物語の書を誦む心得惣じて此道にあつかること共を説く

## 一 医道の大意

一 この道の始まり漢土阿蘭陀等の療治のしかた病家の心得人体のわけ眼に物を見耳に声をきくなどの所以養生のことまでを説く

## 一 年中行事

一 年中行事の書。世に多くあれども大かたは誤がちにて信用しがたけれバ、尽く故実ことごとくに考へてその誤りを弁じ人々今日の心得となる事共を説く

右は新場もちや横手習所に於て御講談御願申候間

御執心の御方は御入来仰願ふ所に候

三月十八日夜より

請待人

席主

このように、篤胤が江戸の町中に講筵を設けて客を取っていたことはよく知られており、彼の著作にも講釈で語られるような口語体のものである。養子 鉄胤かねたねの著した伝記「大壑君御一代略記」によれば、彼は文化八年

から次々に講釈本——「大意もの」と呼ばれる——を成立させたとされており、『玉釋』や『氣吹魅』もまたそういった本の部類に入る。こうした大衆相手の講釈に、正統派の知識人ならざる篤胤の、特質が認められてきたのである。

「講釈師」としての篤胤と、『靈能真柱』の著者としての篤胤。本稿はこれら二つの篤胤像の関係について、これまであまり分析の無かった諸史料の検討によって問い直していくことを課題とするものである。その過程で、既存のある種の『靈能真柱』評価、あるいは篤胤評価に対して、いささか異論を提示する。死生学的な諸研究に対しても、そこで示した知見は、再検討を促すことになることだろう。

## 二 民衆世界と篤胤

さて、ではこのような二つの篤胤像の関係は、これまでどう理解されてきたのであろうか。以下、その両者の関係に言及した議論を管見ながら挙げていきたい。

まず、飛鳥井雅道氏の議論を挙げよう。氏は篤胤の『靈能真柱』に死後安心論の系譜を認めつつ、「講釈」には、『靈の真柱』に整理されきれない篤胤の素顔がありありと浮んでくる」として、「講釈本」を単なる普及の方便として捉えず、「江戸の市井のただなかで、古代から現代の怪異までを、すべて日常の論理、知識、探求によって説きあかそうと試みた」篤胤の姿をそこに見た。

この議論をうけた沼田哲氏によれば、『靈能真柱』で死後安心論を提起することになる篤胤は、「江戸の町人と基盤を共有し、生活感覚を共にしながら、それをとり入れつつ「安心」の理論化をはかり、かつその思想を彼らを対象として講釈することからその学者生活を開始した」のだという。

そして、もつとも積極的に両者を結び付けて評価するのは、子安宣邦氏の議論である。氏は『靈能真柱』の冒頭部分が、人々の宗教的安心の要求に応えるような教説としての性格を表明していることを説明した上で、こう述べる。「篤胤のいわゆる『大意』ものは、国学の篤胤における新たな展開の位相を伝えている。篤胤の国学は不特定の人々の人生の要求に応える教説という性格、神道家の講説や石門心学における講話（道話）と同種の性格をもつにいたるのである。国学は篤胤にいたって人々の要求を内包しながら提示される教説の形成という課題を担う。そのような課題を担った国学が宇宙生成論的な構成をもった宗教的教説として、その主題を鮮明に掲げながら成立するのが『靈能真柱』においてである。『靈能真柱』によって篤胤国学ははつきりと成立する」と。

こうして見るに、何れの論者も、『靈能真柱』に安心論的性格を認め、講釈本を著した篤胤の基盤が民衆世界と近しかったことを指摘する点では、一致している。しかし、飛鳥井氏や沼田氏は篤胤が結局江戸市民を組織することが出来なかつた点を述べるのに対して、子安氏は「篤胤の講説が心学道話のように実際に一般的な民衆を聴徒としてもつたかどうか、ここで問われることではない。語りの受け手として一般的民衆を聴徒としてもちうる言説の性格が問題なのである」と述べて、「一般的民衆を聴徒としてもちうる」ものとして篤胤国学を評価し、人々の「安心への問い」に答える講説家として篤胤を位置付けるのである。<sup>11)</sup>

以上、二つの篤胤像に関する三氏の見解を概観し、その中で最も積極的に両篤胤像を接合させた議論が子安氏のものであることを確認した。氏は、「大意もの」と称される講釈本に見られる民衆世界への志向性と、『靈能真柱』における安心論的性格を接合して、民衆に対する救済論的な国学の講説家として、篤胤を描き出している。

ところが、である。代表作『靈能真柱』の講釈本というものは、篤胤全集のどの版にも収録されていないだ

けでなく、彼の塾が出版した和本を探しても、見当たらないのである。他に講釈本として出されている著述があるにも関わらず、実は『靈能真柱』は、その形態をとって出版されることがなかったのだ。【史料一】の講釈のラインナップの中にも、『靈能真柱』の名はない。つまり、「講釈師」として江戸の民衆に己の思想を説いた篤胤の姿と、『靈能真柱』を著して復古神道神学を確立した篤胤の姿とを、そのまま一致させるわけにはいかないのである。

かくして、以下のような疑問が浮上するであろう。果たして篤胤は『靈能真柱』の安心論を講釈／本によって民衆に伝えようとしていたのか？

### 三 「靈能真柱講本」とその構成

近年の平田家資料の調査に基づく平田国学の再検討<sup>12</sup>は、篤胤研究の水準を一気に高めるものであり、新出史料<sup>13</sup>、あるいは古典的研究が扱った後は長年分析が進まないうままだった諸史料について、研究が進展することになった。上述の問題についてもこの調査が考える材料を与えてくれた。というのも、国立歴史民俗博物館の蔵する平田家資料の中から未刊の『靈能真柱』の講本が再発見されたのである。<sup>14</sup> まずはその書誌概要を示しておこう。

番号・草稿 A (一)・二二二・一

外題・靈能真柱講本

本書題  
別号

内題・靈能真柱講本

サイズ：二十四・五糎×十七・五糎 四十四丁

番号：草稿A（一）・二・三・二二・二二

柱題：靈真柱講本 平田篤胤先生講談 門人等筆記

サイズ：二十五・〇糎×十七・〇糎 三十七丁

両者はそれぞれ未装丁であり、何者かによる整理書き（草稿A・二二二二・一に含まれる）によれば、これら「靈能真柱講本」は「草稿本」「清書本」の「計二冊」からなる。草稿A・二二二二・一の方が、他の篤胤直筆草稿の類と同じ手であり、書き足しや抹消、貼り紙などの訂正の跡が見受けられるのに対して、門人等筆記だというA・二二二二・二はそうした形跡があまりなく、また楷書で書かれているため、こちらが清書本であることは間違いないであろう。よって以下では「草稿本」「清書本」とそれぞれ称することとする。

内容から見ても、清書本には草稿本での訂正が反映されており、清書本に対して草稿本が先行することは明白である。但し、草稿本には書かれているにもかかわらず清書本には含まれていない箇所がある<sup>15</sup>。そして、草稿本・清書本ともども空白のままの箇所があり、結局完成には至らなかったものと見える<sup>16</sup>。

ではそれは何故完成・出版に至らなかったのだろうか。それに関わる篤胤や関係者の直接の証言を得られない現状では、その内容の検討から考えていくしかあるまい。そこで以下、版本・草稿本・清書本のそれぞれの構成・完成状況を見ていくことにする。講本である二本と対照する版本は、最初期のものと考えられる、菅屋蔵版本<sup>17</sup>を選んだ。構成上の項目については、版本を基準に立項し、草稿本にあつて清書本にない、未整理の部分を「草稿部分」として最後に付け加えた。

序 藤原貞直

版本…上(序) 一丁オ〜三丁ウ

草稿本…なし

清書本…なし

序 堤朝風

版本…上(序) 一丁オ〜五丁ウ

草稿本…なし

清書本…なし

冒頭

版本…上二丁オ〜五丁ウ

草稿本…なし

清書本…なし

第一図

版本…上六丁オ〜ウ

草稿本…一丁オ〜二丁オ

清書本…一丁オ〜二丁オ

第二図

版本…上七丁オ〜九丁オ

草稿本…二丁オ〜三丁オ

清書本…二丁オ〜二丁ウ

第三図

版本…上九丁ウ〜十二丁オ

草稿本…四丁オ〜六丁オ

清書本…三丁オ〜五丁ウ

第四図

版本…上十二丁ウ〜十四丁オ

草稿本…六丁ウ〜十二丁ウ

清書本…五丁ウ〜十二丁ウ

第五図

版本…上十四丁ウ〜十七丁オ

草稿本…十二丁ウ〜十三丁ウ

清書本…十二丁ウ〜十四丁ウ



第六図

版本…上十七丁ウ〜二十七丁ウ  
草稿本…十四丁オ〜三十二丁オ  
清書本…十四丁ウ〜三十丁ウ

第七図

版本…上二十八丁オ〜三十七丁オ  
草稿本…なし  
清書本…三十丁ウ（本文なし）

第八図

版本…上三十七丁ウ〜四十四丁ウ  
草稿本…なし  
清書本…三十二丁オ（本文なし）

第九図

版本…上四十五丁オ〜五十六終丁ウ  
草稿本…なし  
清書本…三十三丁オ（本文なし）

第十図

版本…下一丁オ〜五十八終丁ウ  
草稿本…三十三丁オ〜三十五丁ウ  
清書本…三十四丁オ〜三十七丁オ

跋

版本…下（跋）一丁オ〜三丁ウ  
草稿本…なし  
清書本…なし

著述目録

版本…下（著述書目）一丁オ〜二丁ウ  
草稿本…なし  
清書本…なし

奥付

版本…下終丁オ  
草稿本…なし  
清書本…なし

草稿部分

版本…なし

草稿本…三十六丁オ〜四十三丁ウ

清書本…なし

一覽すれば、奥付や序跋といった出版に際して備えられるべき項目が、講本には欠けていることが判るだろう。講本が欠いているのはその箇所だけではなく、第七図から第九図までもがすっぽり抜け落ちている。そして第十図、版本の下巻に相当する箇所も、講本においてはほとんど未完成のままである<sup>18</sup>。

では、ここであらためて版本に即して『靈能真柱』の内容を確認しておきたい。まず冒頭部で篤胤が説くのは、この書の課題である。篤胤の学問の目的を語る上でよく参照されるものではあるが、再検討してみよう。(なお、割註中のルビは括弧内に表記した)

【史料二】

古へ学ビする徒は。まづ主と大倭心を堅むべく。この固の堅在では。真道の知がたき由ハ。吾ガ師ノ翁の。山管の根の丁寧に。教悟しおかれつる。此は磐根の極み突立る。厳柱の。動まじき教へなりけり。斯てその大倭心を。太ク高ク固メまく欲するには。その靈の行方の安定を。知ることも先なりける。〔聖王の行方のことハ、第十圖のてまとなる。終て。〕またその有象を。委細に考察て。また。その天地泉を天地泉たらしめ幸賜ふ。神の功德を熟知り。また我が皇大御国ハ。万ノ国の。本つ御柱たる御国にして。万ノ物万ノ事の。万ノ国に卓越たる元因。ま

た掛まくも畏カシコき。我が天皇命スメラミコトは。万ノ国の大君オホキミに坐マツすことノ。真理マコトノイカリカウソウを熟シユリに知得チて。後に魂タマの行方ユキカタは知るべきものになむ有りける。その由は、図ごとの下モトに次々いへるを見て知るべし。

古学を学ぶ者は、まず「大倭心」を固めることが必要であり、そのためには霊の行方の安定を知らねばならない。そしてその魂の行方は、先に天・地・泉の成立とその実態を考察して、神の功德を知り、この国が万国の本国として卓越していること、天皇が万国の大君であることがわかった上で、知るべきものなのだと、述べられている。

とはいえ、ここで注意しておきたいのは、割註部分である。一つ目の割註では、「霊の行方」は第十図以下、「終の論ひ」で詳しく論じられることが予告されている。二つ目の割註では、天・地・泉の成立と実相にそこに働く神徳、また天皇と皇国の優越性は、各図の下で順次論じられることが予告されている。

この予告の通り、第一図以下の各図は、服部中庸の「三大考」に倣って、「古天地未生之時」以降、天・地・泉が分離しながら成立していく過程を示すことになる。<sup>19)</sup>

他方これまた予告の通り、どこから「終の論ひ」なのかはわかりにくいものの、「第十図の下」において、霊の行方が説明される。そこで篤胤が説くには、地と泉とが分離して両者の間の往還は途絶えたのだから、宣長説のように、人が死後に穢れた黄泉（＝泉）に赴くと見るのは誤りである。現世に並存するが見えない幽冥を大國主神が治めており、生前の魂のあり方次第で、人は死後、さまざまな形をとつてそちらに向かうのであって、よい魂は神となって類縁者の周りに留まって功績有る神となり、さもなくば疫病神や天狗にもなるのである。

つまり、『靈能真柱』は二つに分けられる。前半部分は「古伝」解釈を示しつつ宇宙形成を図解する部分で

あり、後半部分は靈魂の行方を明らかにして安心論的課題に込めようとする部分である。前半部分において宣長―中庸ラインの論じ方を継承して宇宙と神々の形成過程を説いた篤胤だったが、そこで力説された天・地・泉の三層構造は後半部分では後景に退く。後半部分の篤胤は、「大倭心」を固めるのにふさわしい靈魂の行方を示すために、この国土の上に顕幽の二世界を設定して、神々の世界である幽冥の实在を説く。

以上のような整理は特に斬新なものでもないが、かかる内容理解の上で、講釈本作成の進捗状況をもう一度見てみると、次のような点が指摘出来るのではないか。

①「古伝」解釈の形を採る前半部分については、前から順番に書き上げてある。しかし、図一枚あたりの分量が増えはじめた第六図をほぼ描き終えたところで、作業が途絶している。

②安心論的課題に込めるための「第十図の下」については、部分的にしか完成していない。あるいは、部分的には完成している。

ここで「果たして篤胤は『靈能真柱』の安心論を講釈／本によつて民衆に伝えようとしていたのか？」という先ほどの問いを思い起こせば、安心論的課題に答えるための「第十図の下」こそが、次の分析の焦点になるはずである。<sup>20</sup> 結局完成を見なかった「靈能真柱講本」は、如何に安心論の展開を図りつつも中断されたのであるだろうか？

#### 四 「ア、おもしろくあるまい」

では、「第十図の下」に当たる未完成の箇所を草稿本から見ていこう。

【史料三】<sup>21</sup>

さてこれまでの所は、其とく度ごとにおもしろくはないく、御断りは申たれども、中にはきつとお心得になつたることもありませうし、又随分おもしろいといふ所もありましたが、今ばんこれより四つまでにとく所は、実に退屈の来るおもしろくない所でありますから、拙者もこれにをりながらア、おもしろくあるまい、みな様が退屈であらふと心づかひで甚だ心ぐるしくて説にくい所でござる、去りながらこれよりそろく、靈の行方を知て生涯の安心をかたむる所に及ぶことでありますから、実に大切のことでござる、時にその魂の行方のことは、天竺の説には善人は天堂へ行くの、或は極楽へ行くの、また悪人は地獄へ行くのといひ、儒者の説には人は死しては、しることなくちりうせてしまふといひ、また御国でも中古よりは儒仏の説のわたつてこのかた、其説共を神世の事実に混じて、魂は善人も悪人もみな夜見の国へ行くといふまぎれの説がおこり、今の古学者もそれをまぎれと知らずにさること、心得てをる所へ、拙者が神代の事実より及ぼして今現在に見たり聞たりする所の事実を合せて、今度考へきわめ發明いたしたる説をとぎますること故、これまである所から天竺の説はもとより、我が御国も中古より過り来たる説をも弁じ、それはこのまぎれ、これはそのまぎれ、といふことまでをとつくりと正し置いて、さてその実の説をいはねばならぬわけになつて来たてござる

この箇所は、『靈能真柱』後半部分の課題をよく示したものだと言える。篤胤はここで、「靈の行方を知て生涯の安心をかたむる」ことの重要性を説き、以下、神代から今現在までの「事実」によつて發明した説によつて、仏教の地獄極楽説・儒教の気による説明、日本の夜見説など、靈魂の行く末についての誤つた説を正していくことを予告するのである。

しかしそれ以上に印象深いのは、何とも長い前置きである。篤胤は、これまでのところもおもしろくないと断りながら議論を進めてきた旨を述べつつ、ここから先はさらに面白くない箇所に入ると予告している。講釈にしてはつまらない内容を語らなければならないことへの言い訳は、この後も続く。

【史料四】<sup>22</sup>

尤も、そのきまつた説ばかりを申てもよいよふなれ共、それでは各々がたのみに尤もと思はれようもうすく、かつ拙者の骨をりも、また学問の力のほどもしれませぬから、無抛今ばんはまづ其まぎれを申すのでござる、右のわけ故、返々おもしろくないこと故、御退屈であらふと、何共御氣のどくなから、今夜はとんだめにあふことじやと、四つのころまでしんぼふして聞て下さるやうに致したい、とかくこの講釈といふものは、坐中がみなく退屈の様子だわいと思ひますると、心が取込んで来て甚だわるく出来るものでござる、わるく出来るからいよゝきでもおもしろくなし、そのおもしろくない様子が見えてはいよゝくこつちも説にくゝなることでござる、何にいたして、おもしろくないことを退屈せずおもしろいつらをして聞てくれるとは無理なことながら、まづかういつたものでござる、ア、とくもくるしく、きくもたいきなことではござる、時に（以下欠）

実践の結果を反映してか、篤胤はこれから話すところの退屈さどころか、退屈さが退屈さを呼ぶ仕組みにまで説き及び、結局本題に入らぬうちにこの議論は中断してしまう。以下、議論は、死後に魂のよく合う者同士が一群れになるのだと説く一節<sup>23</sup>に飛び、そして『靈能真柱』の大意を説き終えて、聴衆の中には「きつく御帰依有て、なほ彼是と行々の所までを御心をさしそへられて下さる趣き、門人共まで御咄しもあつたるとのこ

と、さてくゝ忝く」思う旨を述べ、神や宣長に感謝する箇所が来て、清書された部分は終わってしまふ。<sup>24</sup>

結局篤胤は、安心論的課題に応えるはずの議論を、講釈として「おもしろくない」点について言い訳するだけ言い訳しておきながら、完成させられずに終わってしまったようだ。「靈能真柱講本」の後半部は、「靈の行方を知て生涯の安心をかたむる」という重大な課題に応える議論を展開することを予告しつつも、それが如何に講釈として面白くないかを力説したところで、中断された。前半部の天・地・泉の形成過程の説明も、第六図で力尽きたかに見える。結局、語り手からして聞き手が「御気のどく」だと述べねばならないような講釈では、民衆向けの講釈として、用をなさなかつたのであろう。

## 五 「学問の力のほど」

だが、それで話を片付けてしまつては、講本を書き上げようとどこまで篤胤が努力した意味が見えなくなつてしまふ。そこでもう一度【史料四】に目をやると、その面白くなさにも関わらず、篤胤が『靈能真柱』の内容を講釈しなければならなかつた意味が見えてくる。即ち、自分の決定的な説だけを述べてもよいのだが、それでは「各々がたの実に尤もと思はれようもうすく、かつ拙者の骨をりも、また学問の力のほどもしれませぬ」から、やむなく詳しく諸説の誤りを論じるのである、と。つまり、『靈能真柱』は篤胤にとつて、「生涯の安心」を固めるに足る理論を提示するだけでなく、学者としての自己の努力と力量とを人々に知らしめるという意味をも持つていたのである。

翻つて考えてみよう。『靈能真柱』が、宣長の『古事記伝』の附録である服部中庸の「三大考」の形式を模し、両者の議論に修正を加える形で自説を展開したものであることは、既に確認した通りである。篤胤にとつ

ての靈魂の行方はこの世界に並存する幽冥である以上、「三大考」に倣って天・地・泉の成り立ちを論じた前半部分は、安心論をめぐる議論とは焦点がずれている。後半部分も、前半の「古伝」解釈を了承した上でなければ十分には理解出来ず、しかも、実は「今の現の事実」が欠けていると指摘されるような、書物の知識に基づいたものであった。死後安心の問題だけが重要だったならば、果たしてこうした論じ方を選んだであろうか。やはり、宣長・中庸ラインの議論の文脈に、学者としての自身を介入させようとする篤胤の意志をも見て取るべきではないか。そうした狙いの故に『靈能真柱』は、国学者平田篤胤の「骨をり」と「学問の力のほど」を示すものでなければならなかったように思われるのである。

実際に『靈能真柱』の登場は、「三大考」をめぐる論争の新たな段階をもたらし、篤胤は宣長門人たちのあいだで、毀誉相半する存在として認知されていくことになる。<sup>26</sup>『靈能真柱』は学者平田篤胤の出世作としては十分に機能したといつてよいだろう。そしてこの『靈能真柱』は、篤胤の著作としては文久三（一八六三）年までで一番よく売れることになる。<sup>27</sup>だが、『靈能真柱』が講釈として理解しやすく、面白いものだったかどうかは、また別の話である。

## 六 「靈の宿替」

しかし、『靈能真柱』の内容を民衆向けに伝えようという努力が、それ以上行われなかったわけでもない。ここで注目すべきは、『靈の宿替』なる著作である。

この書は、篤胤の初期門人である「神職人」内野常正が著したもので、写本でのみ各地に残存している。<sup>28</sup>内野自身によるその序文には、次のようにある。



## 【史料五】

世のものをしふる人々のよくいひよくきとさゝる故に、その教をうくる輩もおのゝ意のおもむく方に其靈を奪ふことをうれたみて、我学ひの親なる菅の屋の大人の、靈の真柱といふいと尊き書をあらハし玉ひぬる、そは誠に神代の古き伝への愛にもれかしこに残りたるをひろひ綴りて、鈴の屋の翁たになほ考もたらされたる事をし真つふさに説きとしまし、将世の人の身まかりて後、その魂の行へき方のたとゝしきをもしるへして明らめ給へる、此は靈幸ふ神の御心といとかしこしや、抑この大人は吉備の国板倉の殿に医師の業もて仕へ玉へる其いとまに、大御国の道のたふとき事を世の人に諭さむと、猛く雄々しき大倭心をふりおこしまして、我業ならねとかくいそしみ玉ふことなむ、尊きかも忝けなきかも

まず常正は、篤胤と『靈能真柱』について説明を加える。即ち、世間の教育者が十分な教えを行なわないうめに、その教育を受けた人々が意のままに「靈を奪」われている現状を憂慮して篤胤は『靈能真柱』を編んだ。散逸した古伝を補綴して、宣長も考えもらしたことを説諭して、死後の魂の行方までをも明らかにするこの書は、神の心に叶う、素晴らしいものである。篤胤は板倉氏に医師として仕えているのだが、日本の尊さを世に伝えようと本業の傍ら努力しており、尊くかたじけないことである、と。

## 【史料六】

然るを神につかへまつる我輩の、口にのみは皇神をたふとみ、おのれこそ大倭魂なれとほこるめるを見るニ、皆漢土と天竺との醜魂しひにて神を穢しまつる事のかしこさに、おのか学ひのたとゝしきをもかへり見す、菅屋大人の常に説きとし坐をる事ともを書綴り、聞のまにゝ靈の真柱にむかへてこの靈の

宿替<sup>ヤトカ</sup>てふ一まきは記しぬる、さるは彼靈<sup>クマ</sup>の真柱は言葉雅<sup>コトハミヤヒ</sup>にしてその論<sup>アケツラ</sup>ひいと高<sup>タカ</sup>ければ、初学<sup>ウヒマナヒ</sup>ひの人には疾<sup>ト</sup>くさとりかたきふしやあらんと思ひつゝ、是書<sup>コトハ</sup>はしも今の世の俗<sup>サド</sup>ひ詞<sup>コトハ</sup>もて書<sup>カキ</sup>ぬれば、ひとわたり見<sup>マ</sup>は目<sup>メ</sup>輝<sup>カキ</sup>く玉の真柱のさとし得る道<sup>ミチ</sup>しるへともなりなむかしと、思ふおふけなさは、中々人笑<sup>ワラ</sup>ひなる事にこそ

文化八壬申歳霜月日 内野常正

文化九なるへし、八年は未年なり

師の靈の真柱撰ひ賜へる同し年に

なもあたれりける

しかし神職仲間は、口では神を尊んで「自分こそ大和魂である」と誇っているながら、皆「漢土と天竺との醜魂しひ」で神を汚している。そのことが恐れ多くて、常正は自分の学問の拙さを省みず、篤胤のいつも説くところを書いて、『靈能真柱』に対して「靈の宿替」と題した一巻を記したのだという。というのも、『靈能真柱』は、言葉は雅にして、その論じるところはとても高度である。これでは初学者には直ぐには理解し難いところがあるのでないか、というわけだ。そこでこの書について常正は、書くのに俗語を以てし、一通り見れば『靈能真柱』理解の一助になるだろう、とするのである。まさに『靈能真柱』がそのままでは大衆相手の教化用には機能しなかつた点が課題視され、それを補うものとして「靈の宿替」が著されたことがわかる。

続く本文の内容も、概ねこの序文に尽されている。口語体で儒教・仏教の徒の批判を行い、外国の思想に魂を奪われている状況を問題視するものであり、狂歌めいた解説が添えられた多くの挿画が付されており、通俗的に復古神道の考え方を伝えるものとなっている。<sup>31</sup>

本文の後には、篤胤による跋文も寄せられており、篤胤の後継者鏡胤も、初学者用のテキストとして、この<sup>32</sup>

書を各地に広めている。<sup>33</sup>『靈能真柱』の難解さを補うこの著作は、平田家公認の、それなりに意味あるものだったと考えられよう。思想はそのままの形で万人に伝わるわけではないのであつて、相手に応じた媒体の選択が試みられているのである。

## 七 おわりに

国学者平田篤胤は、復古神道の死生観を定式化したその著書『靈能真柱』によつて、国学者の世界に参入し、自己の力量を示すことを狙っていたように考えられる。つまり、『靈能真柱』は、死後安心の問題に一つの答えを提示した著作ではあるものの、宣長―中庸の議論のスタイルを引き継ぐ形で書かれた、つまり「古へ学びする徒」<sup>トモ</sup>を念頭においたものなのであつて、大衆相手の講釈とは議論の土俵がずれていた。今日、講

釈師的性格を持つた国学者としても語られる篤胤は、この『靈能真柱』も講本化を図るものの、その内容は自身で「おもしろくない」と認めざるをえないものであり、未完成のまま残された。この著作は、版本としてはよく売れたのだが、講釈とは受容層が異なつていた。『靈能真柱』と「大意もの」はその性格・射程を異にする著述なのである。<sup>34</sup>そして、『靈能真柱』の有した大衆にとつての難解さは、「靈の宿替」のような初学者用のテキストを要請した。本稿がここまで明らかにしたところをまとめなおせば、このようになるだろう。従つ



「靈の宿替」中の挿画の一例。僧侶や儒者が攻撃されている。

て、『靈能真柱』と「大意もの」を接合して、篤胤を民衆に対する救済論的な国学の講説家として捉える見方には、弱点がある。

翻つて、同じ内容の思想であつても、語られるメディア、語られる相手の違いによつて受容の可能態・方向性が異なることを、本稿の分析はいささかではあるが示したものと考える。思想が持つ意味は、語られる場によつて大きく異なる。死生観研究が、まさに現場の〈知〉である臨床死生学との相互作用によつて発展していくべきものと考えるのであれば、様々な死生観も、それが置かれた現場との関わり、あるいはその社会的被拘束性とともに把握することが大切になつてくるのではなからうか。日本における死生観の事例分析である本稿の、議論の直接の射程に即して言えば、今日的な水準で篤胤の思想を位置付けるにあつては、それが如何なる形で書かれ、如何なる形で広められたのかを、歴史的に分析していくことが重要になるのは、明白であろう。この点を主張して、筆を擱く。

■註

- 1 村岡典嗣「復古神道における幽冥観の変遷」、『増訂日本思想史研究』(岩波書店 一九四〇)ほか、多数。平田篤胤の研究史については、遠藤潤『平田国学と近世社会』(ベリカン社 二〇〇八)が詳しい。
- 2 吉田真樹『平田篤胤』(講談社 二〇〇九)六頁。
- 3 遠藤潤「日本社会における神と先祖」、『死生学研究』一(二〇〇三)、石川公彌子「近代日本人の死生観」、『死生学研究』特集号(二〇〇九)など。
- 4 国立歴史民俗博物館所蔵平田篤胤関係資料 箱一〇・五。但し、『明治維新と平田国学』(国立歴史民俗博物館 二〇〇四)五五頁の写真版を参照した。

- 5 後述するものの他、山田孝雄『平田篤胤』（宝文館 一九四〇）、桂島宣弘「平田派国学者の「読書」とその言説」『思想史の一九世紀』（ペリかん社 一九九九）など。
- 6 飛鳥井雅道「思考の様式」『日本近代精神史の研究』（京都大学学術出版会 二〇〇二）七四、八〇頁。
- 7 沼田哲「鬼神・怪異・幽冥」尾藤正英先生還暦記念会編『日本近世史論叢』下巻（吉川弘文館 一九八四）、三二五頁。
- 8 子安宣邦「『靈能真柱』と篤胤国学の成立」『平田篤胤の世界』（ペリかん社 二〇〇二）二四五～二四七頁。
- 9 前掲飛鳥井「思考の様式」八〇頁、前掲沼田「鬼神・怪異・幽冥」三一六頁。
- 10 子安宣邦「救い」と「講説」前掲『平田篤胤の世界』二五八頁。
- 11 前掲子安「救い」と「講説」二六七頁。
- 12 前掲『明治維新と平田国学』、『平田篤胤関係資料目録』（国立歴史民俗博物館 二〇〇七）などを見よ。
- 13 例えば、渡辺金造『平田篤胤研究』（六甲書房 一九四二）の部分翻刻に頼るしかなかった「氣吹舎日記」が容易に利用可能な形になったことが挙げられるだろう。『国立歴史民俗博物館研究報告』一二二、一二八（二〇〇五、二〇〇六）。
- 14 管見の限り、この史料の内容を紹介した研究は、小林健三「靈能真柱の構造」『平田神道の研究』（古神道仙法庁 一九七五）に限られる。史料中の一文を論拠に「靈能真柱」の本旨を「魂ノ行方ヲ知テ生涯ノ安心ヲ堅ムル」ところに認めようとする議論である。但し、「それが聴講者をして、帰依の心をおこさせた、ということも合点がゆくことと思うのである」（一三六頁）としている点では、後段から明らかのように、本稿と評価が異なる。
- 15 なお、いずれにも図そのものは描かれていない。
- 16 こうした成立経緯から考えれば、「門人等筆記」とある著作も「すべて篤胤自身の手によって書かれたものである」と見る（前掲子安「救い」と「講説」二五四頁）ことには疑いが生じる。版本の底本は、あくまで「門人等」の手になる、篤胤の草稿を清書（＝筆記）したものでないか。
- 17 『靈能真柱』の諸版本については、中川和明「平田篤胤の『靈能真柱』の形成と刊行」『鈴屋学会報』二二（二〇〇五）

- がある。
- 18 草稿本の末尾にある未整理部分も、版本では下巻に相当するものと考えられる。
- 19 しかしながらそうした宇宙創生の歴史を語る根拠としてそこに添えられるのは、「古事記」ではなく篤胤自身が編んだ「古伝」とその解釈なのではあるが。「三大考」とその影響をめぐっては、金沢英之『宣長と三大考』（笠間書院二〇〇五）を参照。
- 20 第六図までの講釈本の内容は、概ね版本のそれに対応する。とはいえ勿論、主として議論を判りやすくするためである。版本とは大きく表現が異なる。その綿密な比較も一つの研究課題たりうるものではあるが、本稿の任ではない。それでもあえて明白なところについて二点述べておくならば、①第二図は途中「△大意本」（草稿本三三丁オ）あるいは「古道ノ大意ヲ演説ノ砌リ」（清書本二丁ウ）と書かれたところで記述が終わっている。②第六図の草稿本の記述の一部（二丁余リ）が、清書本では削られている。草稿本の該当箇所には「以下出定笑語ノ附録ニ入ル」「コレマデ也」との貼紙がなされている。草稿の公刊に当たって、平田塾の出版を担った鍔胤が行なった編集作業への着目を促す、よい例ではなからうか。
- 21 草稿本三十三丁オウウ。清書本とは漢字・かなの表記こそ異なるが、内容上の差異については、「みな様」が「各々」となっている以上のものはない。なお、以下の史料については筆者の責任で読点を付した。
- 22 草稿本三十三丁ウ〜三十四丁オ。この範囲の草稿本と清書本の違いを述べておくと、「聞て下さる」が「聞ル、」に、「き」でもおもしろくなし、そのおもしろくない様子が「聞方モオモシロクナイヤウス」に、「まつこういつた」が「斯云タ」に、それぞれ変化している程度である。
- 23 草稿本三十五丁オウウ。
- 24 草稿本三十五丁ウ。
- 25 前掲吉田『平田篤胤』二三八〜二三九頁。
- 26 前掲金沢『宣長と『三大考』』を参照。
- 27 吉田麻子『気吹舎と出版活動』前掲『明治維新と平田国学』三九頁。但し「三大考」に做った『靈能真柱』の議論は、

- 『古事記伝』に対応する篤胤の『古史伝』において更新されていくことになる。『靈能真柱』は、部教・広がりの面では篤胤の主著とも言えるが、内容・平田派における位置付けにおいては、主著と言いつけることに躊躇を覚える著作である。
- 28 「誓詞帳」によれば、文化七（二八一〇）年に入門した芝三田四町目横町の「神職人」であり、数多くの門人の紹介者となっている。『新修平田篤胤全集』別巻（名著出版 一九八一）一六頁など。
- 29 本稿では基本的に架蔵写本を参照し、豊橋市中央図書館所蔵写本を利用して校訂した。こちらは羽田八幡宮の神職であった羽田野敬雄旧蔵のものであり、末尾に「此一巻、たハレ書めきしものにハあれど、上杉篤興の見出ておくりたるまゝ、うひ学ひのなくさみにもと、写させたるよしにて、鍊胤主よりおくりおこせたるなり、天保十二年といふなか月」との羽田野による朱書がある。表記に関する細かな違いや、一方に脱落が見られる箇所はあるが、本文に内容上の大きな差異は無い。
- 30 備中松山。
- 31 写真は架蔵本十三丁ウ、十四丁オのものである。
- 32 「あなおむかしこの文よ。あなおもしろのこの書よ。あはれこは。靈きはる内野の子が。世のものまなぶともがらのひがことを。くゑはらゝかし。うちきためたるかぶら矢ぶみぞも。あはれ世の人。このかぶら矢におどろきて。ちのり入のゆぎのさつ矢とりいでゝ。かの焼鍊の利鍊もてはらふが如く。射ふせかりふせ。世に五月蠅なすしこ魂を。うち止めこせぬ。この書読む五百八百のますらをの子よ。かくいふは。その昔の屋のあるじひらたの篤胤。」この跋文は、篤胤の書き残したものととして全集にも収録されているので、それを採った。「気吹屋文集一の巻」『新修平田篤胤全集』一五（名著出版 一九七八）三四六頁。
- 33 註29を参照。また、安政五（一八五八）年から翌年にかけてのことになるが、奥州の門人から題名不明の図入りの写本を注文された平田鍊胤は、思い当たる著作が無いものの、もしかしたら「靈の宿替」かもしれないということ、他の著作とともに、これを送付している。結局「靈の宿替」は目当ての本では無かったものの、別の本とあわせて「靈の宿替、蘭学弁の如キ物ハ、いくつ二而も宜し」、との返事を得ている。「相馬地方における平田鍊胤書簡

(II)「九十七」、「相馬地方における平田鏡胤書簡(III)」「二〇一」(『國學院大學日本文化研究所紀要』九〇〜九二二〇二〜三)。

34 実のところ「大意もの」のような講釈本と、講釈そのものも別の性格を有するわけだが、今回はその点を組上に載せることが出来なかった。次なる課題である。

35 この点については様々な議論があるが、さしあたりレジス・ドブレ『メデイオロジー宣言』(NTT出版 一九九九、原著は一九九四)を挙げておく。

(みつまつ・まこと 東京大学大学院人文社会系研究科博士課程/國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所研究補助員)



## A Scholar or Preacher? On the Lecture Book of *The True Pillar of Spirit*

Makoto Mitsumatsu

HIRATA Atsutane, a scholar on Native Learning (*kokugaku*) and the author of *The True Pillar of Spirit*, is often referred to as the founder of Restoration Shinto. His above work formed the foundations for the idea, the Spirits, central to Native Learning. Apart from being a scholar, he was also a storyteller or preacher who lectured for the masses in *Edo*. Such preaching represented a diversion from the proper behavior for a scholar. Atsutane left many lecture books based on his preachings, however, *The True Pillar of Spirit* had never been published in this form. Despite this fact, recent scholarship mixed the images of preacher and scholar and emphasized that he lectured on spiritual peace to the masses.

Recently two lecture book versions of *The True Pillar of Spirit* have been discovered. Examination of these will provide further insight into Atsutane and his scholarly purpose. First, the fact that the lecture book existed, but was incomplete shows that he had tried to lecture to the masses about his ideas. Secondly, although lecturing on *The True Pillar of Spirit* was understandably difficult, Atsutane took on this challenge in order to show his depth in the scholastic field and defend his reputation as a true scholar. In short, *The True Pillar of Spirit* is not a popular work for the masses, but a scholarly work for the reading public. In fact, the book was a bestseller and the content follows HATTORI Nakatsune's *On the Three Realms*, an earlier literature in the field. Atsutane's later work, *Exegesis on Ancient History*, surpasses his former theory.